遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴く

岩城秀夫

一

中唐の詩人として著名な白居易（七七二――八四六）、あざなは楽天が長安の太子左賛善大夫から江州の司馬、すなわち今の江西省九江県の事務官に左遷されてきたのは、憲宗の元和十年（八一五）であり、その後、三年余の歳月、彼はこの土地に住んだが、おおむねは失意と憂愁の日々であったと思われる。かつては長安第一の妓女とうたわれ、いまは商人の妻として淪落の生活をおくる女性の琵琶の音に、流浪の悲しみの情をひとしお大きく揺すぶられて、悲愁にみちた佳篇、琵琶行を作ったのは、左遷の翌年であった。

しかし一方では、廬山の麓に草堂を新築し、この土地の生活を楽しんでいた様子が見られもする。いま標題にかかげたのは、その草堂の落成に際して作った詩の第三句であり、彼の詩文集たる白氏文集（巻十六）では、「香爐峯下、新たに山居をトし、草堂初めて成り、偶たま東壁に題す」なる詩に続いて、「重ねて題す」として収められている。時は左遷から二年を経た元和十二年（八一七）の春である。

まず全詩を示そう。

日高睡足猶慵起　月高く睡り足れるも猶お起くるに慵し
小閣重衾不怕寒　小閣に衾を重ねたれば寒さを怕れず
遺愛寺鐘欹枕聴　遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴き
香爐峯雪撥簾看　香峯爐の雪は簾を撥ねて看る
匡廬便是逃名地　匡廬は便ち是れ名を逃るるの地
司馬仍為送老官　司馬は仍お老いを送るの官たり
心泰身寧是帰處　心泰く身寧きは是れ帰處
故郷何獨在長安　故郷は何ぞ獨り長安にのみ在らんや

当時すでに四十六歳を迎えていた詩人にとって、遠くはなれた長安に対する郷愁を断ちきることはできなかったであろうが、一方では江州の風光を愛し、生活を楽しんでいたことをしのばせる詩であり、特にその第三句と第四句がわが国の人々にも広く知られているのは、倭漢朗詠集巻下、雑、山家の部に引かれているほか、「香爐峯

の雪は」との中宮の問いに対し、清少納言がみすを高くまきあげて、人びとをあっといわせたという、枕草子十一段にみえる有名な話柄によることも大きいであろうし、さらには菅原道真が太宰府にあったときの「都府楼は纔かに瓦色を看、観音寺は只だ鍾聲を聴く」なる詩句につき、大鏡は、「これは文集の白居易の遺愛寺鍾欹枕聴香爐峯雪撥簾看といふ詩に、まさざまに作らしめ給へりとこそ、昔の博士どもは申しけれ」としるしていることにもよるであろう。

しかく白居易のこの詩は著名であるが、標題の第三句の解には、問題が残されているようである。といっても、「遺愛寺」にも「鍾」にも「聴」にもさしたる問題はない。要するに「欹枕」の二字の解である。

二

「欹枕」については、従来「枕をそばだてて」と訓みならされている。しかしそれがいかなる動作を意味するかは、必ずしも明確でない。これを「側耳」（耳をそばだつ）「側目」（目をそばだつ）と同様に考えて、注意してなにごとかをする方向に理解することは、危険である。枕が目や耳のごとき感覚器官ではないからである。

とすれば「欹」も「側」も、ともに「そばだつ」とした旧訓自体に問題があるのであろうか。しかしそれを云云するまえに、「欹枕」の二字が、本来いかなる状態を指すかを把握することが、まず先決問題であろう。

もっとも、この二字の解をとりあげるのは、わたくしが最初ではない。すでに「中国語学」七十二号（一九五八・三）に、工藤篤氏が「欹枕について」と題する論文を発表されたことがある。しかしなお充分な解明がなされているとは思えない。

氏は「欹」字の唐詩における五十数個の用例を佩文韻府を中心にあつめ、これを天文・地理など八項目に分類するとともに、説文・広韻などを参照し「欹」が傾斜して不安定な状態をいうことばであることをたしかめられた。この点については、わたくしが同様の検討をくりかえす必要はないであろう。

そして氏は結論的に欹枕について次のような二つの解を示しておられる。

一は倉石教授の御意見である。枕を半回転することによってつまり角枕であればその一稜を立てることによって高枕の状態を求めるのである。一は卑見であるが、枕を直立してのちそれを傾斜し、高枕を求めるのである。さらに上半身を起し、小脇に挾むことによって、半身を支える形にまで進展する可能性がある。云云

右の両説は、いずれも枕の不安定な状態を指すとする点で共通しているが、さらに工藤氏のことばを借りれば、「傾側して不安定となり、その状態を久しく続けることは困難となる」という。

しかし、しかく不安定な状態では安眠をうることができないのではないか。また、たといその姿勢で眠りにつくことができたとしても、「その状態を久しく続けることが困難な」ほど、「不安定な状態」では、すぐに姿勢がくずれて、目が覚めてしまうのではなかろうか。

こうした点について、さらに一考を要すると思われる。工藤氏は「欹」字についての用例は数多く集められたが、「欹枕」の用例はさほど多くはない。わたくしはその不備を補うべく、「欹枕」に関する資料を博捜することにつとめ、とくに詞（詩録）における数多い使用例を通して一応の結論をえた。以下これにつき、のべることにしたい。

三

欹の字が傾側の状態を意味することは、すでに工藤氏の指摘にもあるごとくであって、冠帽を斜めにかぶるのも欹である。たとえば、宋の黄庭堅（一〇四五——一一〇五）の詞、定風波に

冠帽斜欹辞醉去　冠帽斜欹し辞し醉うて去る

（豫章黄先生詞）

とあり、また宋の陸游（一一二五——一二一〇）の「別建安」なる詩には

欹帽揚鞭晩出城　帽を欹て鞭を揚げて晩に城を出ず
驛亭燈火向人明　驛亭の燈火　人に向って明らかなり

（剣南詩稿巻十一）

とあるのは、いずれも醉餘、冠を斜めに、つまり横かぶりにしている姿を考えればよいであろう。たしかにその限りにおいて欹が傾側の状態をいうことに誤りはない。

しかし、それでは欹枕とはどういう状態をいうのであろうか。

欹枕の二字の熟しての使用は、管見に入るかぎりでは、中唐にはじまり、初唐・盛唐にはみられない。ただそれが白居易にはじまるかどうかという点はあきらかでない。例えば彼の友人の元稹（七七九——八三一）にも使用例がみとめられるからである。

晩晴

竹露滴寒聲　竹露　寒聲滴り
離人曉思驚　離人　曉思驚く
酒醒秋簟冷　酒醒めて秋簟冷やかに
風急夏衣輕　風急にして夏衣輕し
寢倦解幽夢　寢倦みて幽夢解け
慮閑添遠情　慮閑にして遠情を添う
誰憐獨欹枕　誰か憐れむ　獨り枕を欹つるを
斜月透窓明　斜月　窓を透して明らかなり

（元氏長慶集巻十四）

以後このことばは、詩人の間に愛用されるようになるが、とくに五代から宋にかけて、詞の中に数多く見出される。そこには詞自体がもつ特殊な雰囲気に多くの関連があると考えられるが、両字の意味を正確に理解する関鍵も、また潜んでいると思われる。

南唐の馮延巳（九〇四——九六〇）の菩薩蠻詞には、国境警備の任にある夫の帰りをまちつつ、空閨をかこつ妻の心情を詠じているが、その中に、

欹枕不成眠　枕を欹だつれども眠を成さず
関山人未還　関山　人未だ還らず

（唐五代詞）

なる句がある。これは夫を偲んで夜もいねられず輾転反側する様を詠じている。

なお一、二を示そう。宋の鄭域の浣溪沙詞別恨に、

酒薄愁濃醉不成　酒薄く愁濃くして醉成らず
夜長敧枕数殘更　夜長く枕を敧てて殘更を数う
（花庵詞選）

宋の張掄の霜天曉角詞、別恨に

曉風揺幕　曉の風は幕を揺るがし
敧枕聞殘角　枕を敧てて殘角を聞く
（花庵詞選）

とあるのなどは、夜更け、あるいは明け方近くに、眠れぬままに輾転反側している様子をうかがわせる。そうした点をよりよく示すものとしては、さらに黄庭堅の訴衷情詞をあげることができる。

自敧枕處　自ら枕を敧つる處
獨倚欄時　獨り欄に倚るの時
不奈愁何　愁を奈何んせざらんや
（豫章黄先生詞）

愁とは眉を寄せることであり、愁えて楽しまないさまをいうから、右は眠りにつかれぬままに枕を敧てたり、床をはなれて欄干に倚りかかったりしているのである。この例では、不眠の夜にとる特殊の姿勢として敧枕の二字が使用されているごとく考えられる。また陸游の「花時遍遊諸家園」なる詩に「敧倦枕」とあるのは、いっそうそのさまを思わせる。

欲睡未成敧倦枕　睡らんとして未だ成らず倦める枕を敧つ
輪囷帳底見紅雲　輪囷の帳底に紅雲を見る
（劍南詩稿巻六）

倦枕とあるからは、いっそう不眠のさまを感じさせるが、ほかに、熟した例としては、宋の張掄の臨江仙詞、禁中舟桂に「敧醉枕」とあるのをあげることができる。

且図敧醉枕　且らく醉枕を敧つるを図りしに
香到夢魂中　香は夢魂のうちに到りぬ
（花庵詞選）

醉ったまぎれに横になり、枕を敧てているうちに、いつしか夢路をたどったというのであろう。

また陸游の愁思なる詩には、「敧枕」の二字を次のように四字にのばした例がみとめられる。

払枕敧眠不成夢　枕を払い敧眠すれども眠りを成さず
郤拖藤杖出門行　郤た藤杖を拖いて門を出で行く
（劍南詩稿巻七十二）

枕を払うて敧眠する、というのも、敧枕と異ならないであろう。また単に敧眠とする例もないではない。宋の王安石（一〇二一――一〇八六）の漁家傲詞、極能道閑居之趣には、次のようにみえる。

午枕覚来聞語鳥　午枕覚め来つて　語く鳥を聞き
敧眠似聴朝鶏早　敧眠すれば朝の鶏の早きを聴くに似たり
（花庵詞選）

敧眠の例は勿論これにとどまらない。宋の曾紆の菩薩蠻詞、月夜にも見える。

臥対白蘋洲　臥して白蘋の洲に対し
敧眠数釣舟　敧眠して釣舟を数う
（花庵詞選）

枕は仄聲、眠は平聲であるから、詞や近体詩においては、敧枕とすべきところを平仄の関係で敧眠に作る必要も生じるわけであり、また陸游の例のように、四字にのばすことも起こりうるのである

が、意味そのものに差異はないであろう。

四

以上にあげたいくつかの欹枕の用例は、それがおおむね不眠の夜の輾転反側の状態に関係のあることを思わせるが、具体的にいって枕がいかなる状態になることをいうのか、あるいは人がどうすることなのか、そうした点について検討を加えねばならない。しかし、それには、まず当時いかなる枕が使用されていたかを考えておく必要がある。

唐宋の出土品中にみられる枕はすべて陶製であり、考古学の方では、陶枕が枕として、また実用のそれとして使用されていたと考えられているようである。盧生邯鄲の夢で知られる唐の沈既済の伝奇、枕中記の中で、盧生が道士から借りる枕も陶製であるから、唐宋の間において陶枕が使用されていたことは、まぎれもない事実であろうが、一方、枕といえばすべて陶製であったかどうか、そうした疑念が残らぬではない。わたくしは六朝において木枕が使用されていたとみとめられる事実から推して、唐宋間にあっても木製のものが使用されていたのではないかと考える。すなわち玉台新詠巻十に、宋（六朝）の許瑤の「詠枏榴枕」と題する詩を収めるのがそれである。

端木生河側　端木　河の側に生じ
因病遂成妍　病に因って遂に妍を成す
朝将雲髻別　朝には雲髻と別れ
夜與蛾眉連　夜には蛾眉と連なる

枏榴は枏（くす）の木に生じた瘤の意であり、この詩はそれで作った枕を詠じたものである。つまり木製の枕である。

六朝におけるかかる木枕の使用が、その後に全く絶えてしまったとは考えがたい。おそらく唐宋間には陶枕と木枕が、ともに使用されていたのではなかろうか。あるいはなお別種のものがあったかもしれないが、それはいつそうあきらかでない。ただ当時は男女ともに結髪していたから、堅い枕が使用されていたとみるべきであり、坊主枕のごときを考えるのは適当でない。

わたくしのみたかぎりでは、唐宋間の陶枕は形が一定していなかったが、五代の詞の中には、枕函なることばが見出され、この場合、方形の陶枕も、あるいは木製の箱枕の如きを考えるべきかと思われる。

五代後蜀の欧陽炯の三字令詞には、次のような例がみとめられる。

人不在　人は在らず
燕空帰　燕は空しく帰りぬ
負佳期　佳き期に負かれ
香燼落　香の燼きて落ち
枕函欹　枕函　欹ちぬ

（唐五代詞）

五代とよばれる時代は、唐のあと、宋の興るまでの五十年ばかりの短い期間、北方では五つの王朝がつぎつぎと交替したのであるが、南方の揚子江流域にも、いくつかの地方政権が存在し、十国とよばれた。その中の詞人の一人、閩后陳金鳳の思帝郷詞にも、枕函なることばが見える。

雲髻墜　雲なす髻は墜ち
鳳釵垂　鳳の釵は垂れぬ
髻墜釵垂無力　髻の墜ち釵の垂れて力無く
枕函欹　枕函は欹ちぬ

（唐五代詞）

さきの欧陽炯の詞は、相思う人が約束の時間にも来ず香も燃えつきてしまった。あきらめて横になってはみたものの、いっこうに寝つかれそうもない、そうした夜のさまを詠じたものと思われる。またあとの閨后陳金鳳の詞は、眠れぬ夜の苦しさに輾転反側して雲なす黒髪の髻もくずれ、髪にさした鳳の飾りのある釵も、だらりと垂れ下ったのであり、その際に枕函がそばだつというのである。欹枕が欹枕函と三字にのびているわけであるが、とくにあとの思帝郷詞の場合、前の三句の髻や釵との関係において、欹枕の意味をさぐることができそうに思われるので、さらに髪と欹枕の関係を示す例をあげて考えてみることにする。

後蜀主孟昶の木蘭花詞に次のような句がある。

欹枕釵横雲鬢乱　枕を欹つれば釵は横ざまに雲なす髪は乱れぬ

（唐五代詞）

この詞は、一説では宋の蘇軾の作ともいわれているが、いまは深くはふれないでおく。句中の「釵横」を「釵は横ざまに」と訓じたが、要するに、まともに挿してあつた釵が、ゆがんで、しどけない挿し方になることであろう。また「雲鬢乱」の鬢は、いうまでもなく頭の左右側面の髪であり、美しく結いあげた雲なす髪がほつれた、というのであろう。そしてそれは欹枕によつて生じた結果と解すべきであるから、その際に頭が枕に対していかなる位置、あるいは角度になっているかを考えれば、解決がつくと思われる。

一体髪が乱れるのは、頭の側面が枕に接触する、すなわち髪が枕におさえつけられるときにおこるのであり、横向きの姿勢が考えられる。まともに上向きの姿勢に寝ているときには髪の乱れることはありえない。また釵についていえば、これは結髪して側面から挿すのであるから、髪の乱れるような姿勢であれば、当然、釵の挿し方もくずれて来るわけである。これも正しく仰臥の姿勢にあるときには、おこりえない現象である。

すなわち欹枕の際には、人は上向きの姿勢ではなく、左右いずれかの横向きの姿勢で臥していることになる。

欹枕によって髪のかたちや釵の挿し工合がくずれるという表現は、このほか欧陽炯の洗溪沙詞にも見られる。

斜欹瑤枕髻鬟偏　瑤枕を斜欹すれば髻鬟偏よりぬ

（花間集巻五）

この場合の斜欹は、欹が二字にのびたにすぎないから、斜欹瑤枕は要するに欹枕である。また髻鬟が偏よるというのは、前例同様に頭部の側面が枕に接触したからにほかならない。また宋の女流詞人として名高い李清照（一〇八四――？）の蝶恋花詞、離情にも次のような句がある。

山枕欹斜　山枕欹斜すれば
枕損釵頭鳳　枕は損いぬ釵頭の鳳

（花庵詞選）

釵頭鳳とは、釵の先端についている鳳の形をした飾りをいうのであろう。ちなみにいえば李清照より少しおくれて、南宋の陸游が不本意にも別れなければならなかったかつての妻に、沈氏の園でめぐ

り違い、悵然として釵頭鳳の一詞を賦したことは有名である。陸游は無名氏の詞に「可憐孤似釵頭鳳」（憐れむべし　孤なること釵頭の鳳のごとし）とあるのをとって、擯鳳詞のリズムで詞をつくり、釵頭鳳と名付けたといわれる。鳳は雌の鳳とで一対になるのであるから、釵の先端に鳳のみがついているのは、孤独の象徴と解されるのであり、陸游の意もこれにほかならぬであろう。

したがって右の李清照の場合も、欹枕したことによって、すなわち正しい仰臥の状態から横向きに姿勢を変えたことによって、釵の先端の飾りが枕に触れるかあるいは頭と枕の間にはさまれるかによって、損傷するのだと解せられる。

それでは横向きの姿勢に臥した場合、なぜ欹枕ということばを用いるのか。

すでにのべたように、この場合、頭部の側面が枕に接触するわけであるが、先ず正しく仰臥して、しかるのち体を横転させた場合を考えてみるに、頭部の側面は枕の中央部ではなく、それよりも左寄り、もしくは右寄りになるわけであるから、頭部の重みは枕の端のほうにかかることになる。いまかりに枕を直方体の堅いものとして考えた場合、重心が一方の端にかたよってかかる以上、反対の端はなにがしか浮かび上がるわけである。枕からいえば、その状態は、欹、すなわち傾斜しているわけであり、それを欹枕の二字で表現したのではないかと考えられる。もっとも枕の形状や軽重によって、当然傾斜の度合いに差異が生じるはずであり、もしさきの枕函の二字から、日本の箱枕のごときを考えることが許されるならば、右の推測はいっそう容易になる。

しかし一方では横臥の姿勢を変えたぐらいで、欹枕、すなわち枕が傾斜するものではないという反論も予想される。たしかに物理的にいえば、なにほどの傾斜ももたないかもしれない。しかしその一端に頭部をのせて横向きの姿勢で臥した場合、頭部の後方にある枕の他の端が、なにがしか浮かびあがるごとく感じても不思議ではない。それを文学的に欹枕の二字で表現することも、またありえたのではなかろうか。

すくなくも右のいくつかの例を通してみたかぎりでは、眠れぬままに輾転反側するときに、おのずから生ずる枕の傾斜をいうことばとして、欹枕の二字は使用されていると思われる。そうした場合には釵や髪の乱れるのを防ぎようもなかったわけであり、それはまたしどけない姿態であるだけに、艶麗な雰囲気を多分に有する詞の中に、より多く使用されたのでもあろう。

夜の眠れぬままに、右に左に輾転反側すれば、髪はほつれ髪のかたちもくずれ、釵も垂れ下がるであろう。幾度も寝がえりをうつのを、「枕の頻りに欹つ」と詠んでいる場合があり、右の推論を裏付ける。宋の晏仁の多羅詞、記恨に

翠雲撩乱枕頻欹　翠雲撩乱し　枕は頻りに欹つ
（花庵詞選）

南唐後主李煜の烏夜啼詞に

燭殘漏滴頻欹枕　燭殘り漏滴り　頻りに枕を欹つ
（南唐二主詞）

とあるなどは、その一、二の例である。

五

欹枕が具体的にどういう状態をさすかは、これでほぼあきらかになったと思われるので、次に和訓の面にふれておこう。

欹の字を「そばだつ」と訓じたのが、いつにはじまるかは詳らかでないが、永保元年（一〇八一）から仁治二年（一二四一）の間に作られたと推定されている菅原是善の類聚名義抄には、「ソハタツ」の訓がみえ、少しくさかのぼっては、工藤氏の指摘にもあるように、源氏物語の須磨の巻に、

枕をそばだてて四方の嵐を聞き給ふに浪ただここもとに立ち来る心地して

とあり、これが白居易の詩句をふまえての表現であるとすると、「そばだつ」の訓は、白氏文集舶載の当初より行なわれていたものと考えられる。

ところで時代は下るが荻生徂来の譯文筌蹄巻三には、欹と傾とを次のように説いている。

欹　ソバダツ　傾　カタフク　義近シ二字共ニ一方サガリ一方アガリタルコトナレドモ　傾ハ一方ヲサグル方ヲ主トシタル詞ナリ　欹ハ一方アゲタル方ヲ主トシタル詞ナリ　此ワケニテ和訓モカハリタリト見ヘタリ　サレバ欹ハ斜ニ立ツナリ

「そばだてる」という大和ことばは、おそらく「そば」（側）を「たてる」の意であろうから、一端をもちあげて傾斜せしめる欹の字の意味とほぼ合致するのであり、その点で、枕をそばだてるという和訓は、欹枕それ自体についての忠実な飜訳であり、正確であるといえる。しかしながら、「そばだてる」ということばは、前にもふれたように、側耳（耳をそばだてる）・側目（目をそばだてる）といった場合にも用いられるために、欹枕の二字に対して、注意して聴くような印象を与え、一部には誤訳も生じたようである。

六

ここで標題の白居易の詩句にもどることにする。これは遺愛寺の鐘の音を聴くために、あるいはよりよく聴こうために、枕を欹てると解すべきではない。なぜなら欹枕は鐘の音に注意を集中するためにするのではなく、そのときの作者の横臥の姿勢をいうにすぎないからである。そしてさらに注意すべきことは、これまで欹枕に関する資料としてとりあげてきた詩詞とは、この詩はちがった雰囲気をもっている。すなわち、第一句に「日高うして睡り足れるも猶お起くるに慵し」とある。これは眠れぬ夜のさまでなく、日の高くなるまで熟睡した朝のさまであることというまでもない。起きるのも面倒だ。中二階にいく重ねかの掛けふとんを着ているから、寒さの心配もいらない、といった状態である。時刻は深更でも夜の明け方でもない。むしろ朝もおそい時間である。したがって、とくに時間を示すことばのない第三句を、深更や夜明けの情景として解する必要はない。いな、そう理解すれば誤りである。詞の場合に多くみられる輾転反側の様子をこの時の作者にあてはめては正しくないのである。いわば朝寝坊のずる寝の姿である。しかもまともな仰臥の姿勢ではない。香鑪の峯の雪をみすをはねあげて見るというのは、起き上ってまともにみすを捲きあげて見ることではあるまい。床から出れば寒いから、ふとんの中に寝たままで手をのばしてする不精な動作をいうのである。鐘の音を聴く作者についても、聴くための努力をしていると考えるべきではなく、朝の寝覚めのけだるさ、も

のうさに、なにとはなしに横向けに寝そべっている恰好である。髪や釵を気にしながら、まともに上を向いた仰臥の姿勢に比べると、のんびりした、いわばだらしのない寝姿である。

匡廬こそは、うるさい名誉心から逃れるよき場所であり、司馬というつまらぬ官も、隠居役としてはなかなか適当であるとし、江州を第二の故郷とも考えて、結びの句には、「故郷は何ぞ独り長安にのみ在らんや」と、地方官生活の気楽さをうたっているのであるが、いまその地に新居を設けた喜びを、この詩の第三、四句によんでいるとみるべきであろう。のんびりと朝寝したままで遺愛寺の鐘の音がきかれること、それはやはり寝そべったまま手をのばして、みすをはねあげると香鑪峯の雪がながめられるのとともに、作者の喜びであり、新居についての自慢でもあると解すべきである。目と耳とを居ながらにして楽しませることができる、いわば不精の中にえられる楽しさ、それが白居易の喜びである。鐘を聴こうために、わざわざ身を起したりするのでは、勿論ない。髪のことなど気にしないで横向けに寝ころんだままで遺愛寺の鐘の聴けることが新宅落成に際しての何よりの自慢であったわけである。

ところでさきにもふれたように、元稹に「誰か憐れむ独り枕を欹つるを、斜月窓を透して明らかなり」という句があり、これは眠れぬ夜のさまを詠じたものと理解される。白居易と元稹といずれが早く欹枕の二字を用いたかは、詳らかでないが、両人の使用例には差異があるわけである。元稹は眠れぬ夜の輾転反側を欹枕で表現しようとしたのであり、五代から宋へと、とくに、詞の分野では元稹と同じ方向に用いた場合が多いが、さればとて標題の詩句について、それと同様に解するならば、既述のごとく第一句の「日高うして眠り足れるも猶お起くるに慵し」と矛盾するのであり、白居易のこの詩の場合、前述のように、おそくまで熟睡した朝の、起きるのも面倒で寝そべっている作者の様子を想像するのが、正しいであろう。姿勢は横向き、枕はなにがしか傾斜していたはずである。

以上、私は白居易の詩句につき、欹枕の語を中心に検討してきた。そしてこの語の意味をほぼあきらかにしえたと考える。しかし一言付け加えておきたいのは、欹枕の二字が常に上述のような本来の意味をもちつつ使用されているとはかぎらないことである。詩語として単に横臥する意味で使用されている場合があるので、一例を示しておこう。蘇軾の西江月詞である。

解鞍欹枕綠楊橋　鞍を解き枕を欹つれば綠楊の橋
杜宇一聲春曉　杜宇の一聲　春の曉

（花庵詞選）

解鞍とは鞍をおろすことであるが、ここでは旅宿に着いたことを意味するから、同様に欹枕の二字も本来の意味がうすれて、単に横臥することを意味していると考えられる。

（一九六二・一〇・一五）

（山口大学講師）